

群 教 セ	F09 - 01
	平 15.217集

不登校生徒への 組織的な指導・支援体制づくりの工夫

生徒指導主事の立場として、連携した教育相談を目指す

特別研修員 高木 朋重 (尾島町立尾島中学校)

《研究の概要》

不登校や問題行動の予防・早期発見・解決のためには、校内の教育相談のシステムを転換し、チームで指導・支援する体制づくりが第一と考えた。また、今年度よりスクールカウンセラーが配置されたことを、全職員の意識変革と、組織的な支援体制を構築する契機ととらえた。生徒指導主事として、校内の人的資源を活用し、連携した教育相談を充実させることが、不登校や問題行動の予防と解決につながることを実践を通して研究する。

【キーワード：教育相談 ほっとルーム 生徒指導主事 組織 連携 チーム】

主題設定の理由

数年前、本校では「無気力」や「非行」タイプの不登校が多かった（年間 30 日以上欠席した生徒の 36 %が無気力や非行）。そのほかに毎日のように遅刻、という状況の生徒も 4 名ほどいた。学校生活から逸脱した生徒は「逃げ場所」として「相談室登校」を望み、「ほっと R o o m」（当時の相談室の呼称）が繁盛してしまい、「たまり場」と化した。さらに、「ほっと R o o m」にクーラーが設置されたことで、夏、「たまり場」は「避暑地」となり、学校の秩序は揺らいだ。職員の関心は不登校の生徒よりも、問題行動の方に行かざるを得なかった。

その反省から、翌年、「ほっと R o o m」は生徒全員が利用できる場であることを再確認し、「たまり場」から本来の「相談の場」によみがえらせようと、「相談室利用のきまり」を作ったことによって、少しずつ相談室として機能するようになってきた。

学校は落ち着きを取り戻したが、今もなお、全校の生徒の中には、自立心・耐性・人間関係をこなす能力等、学校生活に適應する力が身に付いてない生徒も多く、不登校は 4 ~ 5 名、その他登校を渋る生徒、体調不良を訴える生徒、悩みにつぶされそうな生徒も少なくない。

不登校生徒を抱えた担任や学年は、精神的な負担を感じている。特に担任は保護者との連携に戸惑いながらも、何かできることはないかと、模索している。

今年度より、「スクールカウンセラー（以下 S C と呼ぶ）」が配置された。予約でいっぱいになる日もあるほどの盛況ぶりである。が、担任が S C に任せきりで、手を引いてしまっているように見えることも時々ある。役割分担が不明瞭で、「連携」とは言い難い。

このような本校の実情から、生徒指導主事という立場として、不登校生徒の学級復帰、不登校や問題行動の予防とアフターケア等のために、S C と連携し、「ほっとルーム」を核とした教育相談機能を充実させ、チームで指導・支援をしていきたいと考え、主題を設定した。

研究のねらい

「ほっとルーム」を核とした教育相談のシステムに改善し、かつ、S C とのコンサルテーシ

ョンや研修会等を通して教師の知識や指導技術の向上を図ることによって、よりの確に、しかも多面的に生徒を理解することができ、生徒に合ったきめ細かい支援が可能になる。また、保護者と担任との連携にSCが加わることによって、連携体制が強化でき、チームによる指導・支援が可能になる。

これらの実践を評価しながら積み上げていくことで、教育相談が充実し、「生徒の集団適応力の育成」「不登校生徒の学級復帰」「不登校や問題行動の予防」につながることを検証する。(図1)

研究の内容と方法

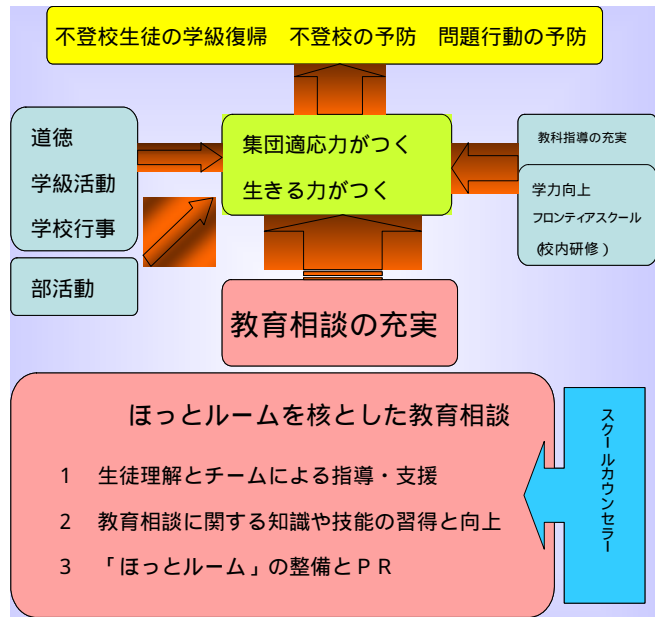


図1 教育相談全体構想図

アンケート調査を行ったり、文献に当たったりしながら、SCと連携する上での問題点を把握し、その改善策を考え、以下に挙げる3点を中心に、実践していく。そして、生徒指導委員会を中心に、教育相談部会、不登校プロジェクト(以下不登校P)と呼ぶ) 随時行われるコンサルテーション、ふだんの職員室での会話等で、絶えず現状を点検・評価し、フィードバックして工夫を加え、積み上げていく。

1 相談・コンサルテーション

(1) 教育相談の組織を整備

校務分掌を基本とするが、生徒の実情に合わせて役割を明確にしていく。例えば、わたしの主な分掌は生徒指導主事、3学年の生徒指導担当、3学年の教育相談担当、3学年の安全教育担当で、3年担任もしているが、このように、小・中規模校においては複数の分掌を兼務することが多い。すると、役割分担が不明瞭になってしまうので、生徒の実情に合わせてコーディネーター役(養護教諭・教育相談主任が多い)を決め、チームで指導・支援できる体制にしていく。(図2)

(2) SCとの連携の具体的方策を実践

SCの勤務日・勤務時間と担任

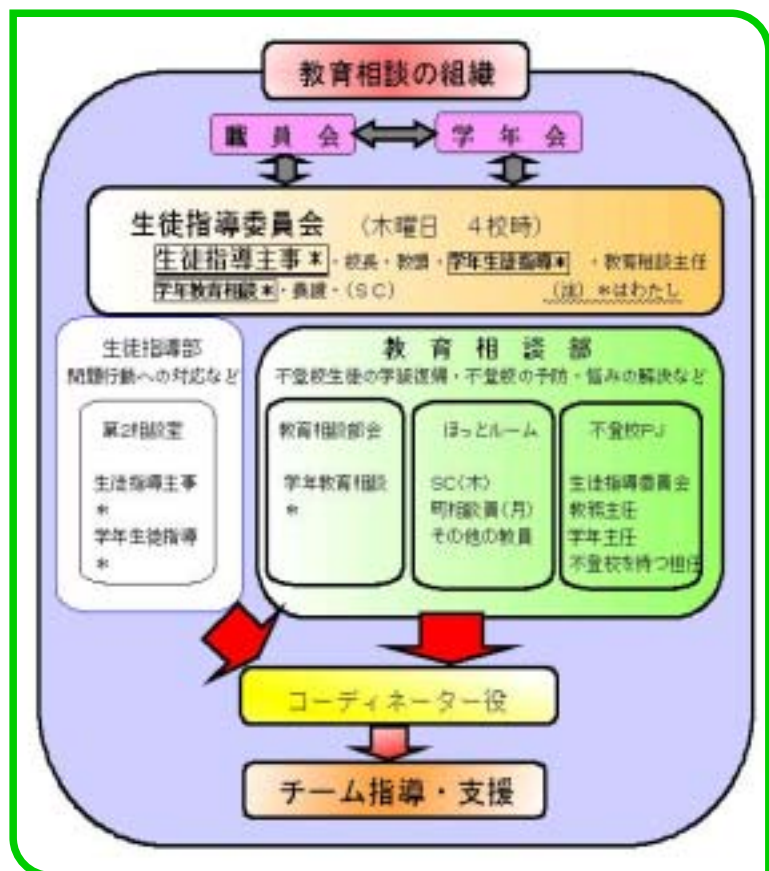


図2 教育相談組織図

の空き時間や放課後の少ない時間を有効に使えるよう、コンサルテーションの時間・場所を調整し、確保する。また、「コンサルテーションカード」を用いることによって、SCとの連携をより円滑にする。

2 研修会の実施等による知識や技能の習得と向上

SCの専門性を教育相談に生かすために、教員への研修会等を学期に1回以上実施し、教育相談に関する知識や技術の習得を図る。

3 「ほっとルーム」の整備と啓発

相談しやすい環境づくりに努める。(図3)
また、「相談室だより」や「学校通信」その他の学校からの通信類を配布したり、学年集会や学級活動、保護者会等でPRしたりして、SCの紹介や「ほっとルーム」の利用方法等について知らせ、普及に努める。

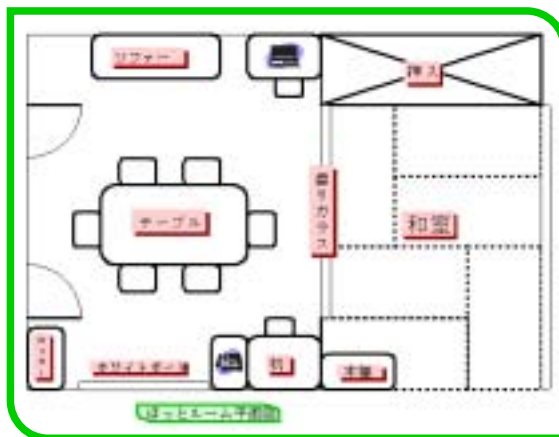


図3 ほっとルーム

研究の結果と考察

1 1年間の実践の概要と評価

4月からの教育相談にかかわる実践の概要と、その評価を記すと表1のようになる。

表1 実践の概要と評価

	1 相談・コンサルテーション	2 研修会	3 ほっとルームの整備と啓発
一学期	2週分の「教育相談予定表」を作り、「ほっとルーム」前の廊下に掲示。 親・生徒と担任またはSCが相談。 各学年会議でSCと顔合わせ。(5月) 空き時間・放課後を使って、SCと担任とのコンサルテーション。(随時) 学年によるチーム支援 夏季休業前に不登校Pを開催。	SCと夏季休業中の職員研修の内容を相談。	「相談室だより」を発行し、SCや「ほっとルーム」の利用方法を紹介。SC・町相談員も記事を書く。 保護者会や生徒集会でSC・町相談員を紹介。 「スクールカウンセラー業務日誌」の活用。 「生徒理解のための名簿」作成。 生徒指導委員会(木4)で不登校生徒への対応等を話す。 アンケート調査実施。(6月)
評価	親の相談が多く、教育相談主任がパンク状態。 SCとコンサルテーションする時間がとれないし、週2日勤務を望む声が多い。	1学期にも実施可能。	不在の時の電話対応が不可能。 生徒が気軽に相談に行けるための工夫が足りなかった。 親の相談が多く、SCが生徒指導委員会に参加できない。
夏休み	担任による「集中教育相談」実施。(8月下旬、三年は三者面談) 休業中にもSCの勤務日を設ける。(3日間)	職員研修「生徒理解」実施。(8月)	各学年会で対応を話す。 職員会議で近況報告。 教育相談総会を開く。
評価	部活とのかねあいで、期間が短縮の余地有り。 職員の出張が多かったため、SCと会えない職員もいた。	出張等で参加できない職員もいた。	保護者からの申し込みが増えた。 電話対応が不可能。
二学期	各学年の教育相談担当または養護教諭がコーディネーター役、連絡調整をする。 月・木曜日の昼休み・放課後は、全生徒を対象	職員研修「カウンセリング実習」実施。(冬休み)	相談室に必要な物品希望調査をし、必要なものから購入。 (留守電/FAX付電話、ござ、ロッカー等) 「相談室だより」を発行。

	に「ほっとルーム」を開放する。 冬季休業前に不登校P Jを開催。		月の最終週の生徒指導委員会にはS Cは必ず参加する。 その他の週は相談が入ってなければ参加。 アンケート調査実施。(12月)
評価	職員の「ほっとルーム」の使用頻度が高まった。 予約がいっぱいで、コンサルテーションカード に文章記述している時間が十分にとれない。	学期末は多忙す ぎるので、冬休 みに実施した。	必要な物品がそろい、相談しやすい環境が整ってきた。 生徒・保護者からの申し込みがますます増えた。 ソファがほしいが、高額すぎて購入できない。
三 学 期	学年の生徒指導担当や教育相談担当が率先し て、コーディネーター役をする。 年度末休業前に不登校P Jを開催。	職員研修「事例 研究」実施予定。(2 月)	秘密文書等の管理の徹底を図る。 「相談室だより」を発行。
次 年 度 へ	可能ならば、S Cの机を職員室内に設置。 S Cが週2日勤務にできるとよい。	来年度は、1学 期にも実施。	S Cによる保護者・生徒への講演等を実施するの もよい。 S Cの勤務日の翌日に生徒指導委員会を入れた方がよい か。(検討)

2 「生徒理解のための名簿」の活用

5年前から作成していたものを毎年改善し、生徒の実情をつかむのに役立てている。現在、データは1台のパソコンに記憶させてある。印刷したものは、生徒指導主事その他必要な職員のみ持っている。取り扱いには十分注意が必要。データは進級に伴い、次の担任に引き継ぎ、新たな情報を追加していく。(別添資料1)

情報の蓄積、情報の引き継ぎという点で、役に立っている。今後も改善を加え、より使いやすいものにしていくことが課題である。

3 2週分の「教育相談予定表」の作成・掲示

いくつかの相談受け入れ経路をたどって、最終集約・調整は教育相談主任が行う。「ほっとルーム」でのコンサルテーションやS Cによるカウンセリングの2週分の予定表を作り、入り口付近の掲示板にはる。生徒も職員も空いている時間を指定し、申し込む。(別添資料2)

予約でいっぱいの日が多く、翌週を予約することもしばしばある。だからこそ、2週にわたるこの表は必要不可欠と考える。

4 生徒指導委員会の定例実施

今年度は毎週木曜日の4校時に実施している。学校行事等のない限り、毎週行っている。年間にして、30回程度は開催できている。問題行動や不登校の予防・対応などを検討し、職員会や学年会で全職員に提案し、推進していく、生徒指導・不登校対策の心臓部である。また、不登校や継続的な指導や支援を必要とする問題行動には、生徒個々に合わせてコーディネーター役を決め、その後のコンサルテーションや指導・支援につなげていく。ここで話された内容については、緊急・重大なものについては翌日の打ち合わせで職員に伝える。その他軽微のものは、ファイルに入れて、各学年に回す。進行は生徒指導主事。50分間の流れは以下の通り。

不登校生徒の状況とその対応(各学年教育相談担当) } ただし、今年度1・3年は兼務
問題行動等の報告とその対応(各学年生徒指導担当) }

養護教諭より(来室状況や気になる生徒について)

教育相談主任より(S Cとの連絡、ほっとルームでの相談予定)

検討事項(緊急性のあるものから検討し、案を作る)

管理職より(評価と助言)

授業のコマの中に位置づけることは大変難しいことであるが、時間割作成担当の努力によっ

て今年度も実施できた。校内の動きをつかむには不可欠。50分で終わらず、給食準備の時間に食い込んでしまうこともあるので、効率のよい進行を心掛けなければならない。SCも参加する方向で努力しているが、実際は相談の予約がいっぱいで、参加できないことの方が多い。

5 「コンサルテーションカード」の活用

SCによるコンサルテーションの時間が確保できないという指摘を受け、短時間に効率よいコンサルテーションを行うために、あらかじめ生徒の状況や現在までの支援、現段階の課題等を記し、事前にSCに渡しておく。最低限SCにコメントだけはもらう。(別添資料3・4)

記述することは案外時間がかかるもので、メモ程度で構わないと言っても、詳しく書く先生が多い。アンケートでは、「まとめて記述したらどうか。」という意見があったので、来年度の参考意見としたい。

6 生徒指導主事がコーディネーターの役割をし、コンサルテーションしてきた例

連携した教育相談をする際に、コーディネーター役の存在は大きい。現状は養護教諭がその役割を果たすことが多いが、教育相談主任や生徒指導主事がその役割をすることもできる。

今年度の一例を挙げる。無気力、遊び・非行型の不登校生徒への指導・支援の例である。生徒指導主事であるわたしがコーディネーター役を務め、担任、養護教諭等へのコンサルテーションを行ってきた。担任は生徒とのリレーションづくり、養護教諭は避妊や性病などの性教育、生徒指導主事はき然とした態度で善悪の判断を教えていく、というように役割分担を明確にし、学年の教師の力も借り、保護者との連携を図りながら指導・支援を続けた。(図4)

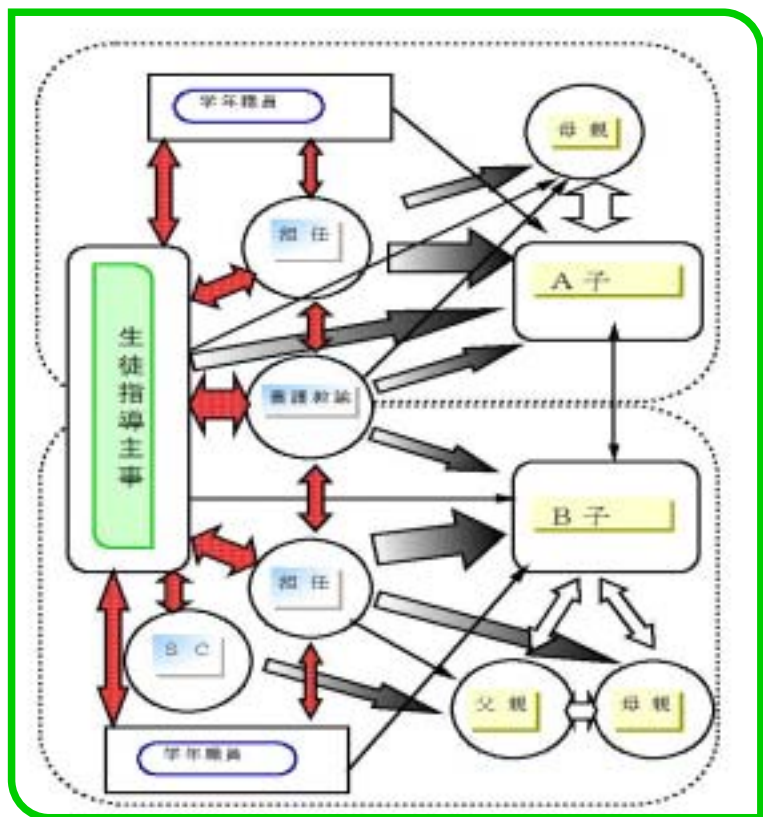


図4 生徒指導主事のコンサルテーション例

このようなタイプの不登校生徒

は、行きたい学校へは行けず、行ける学校もどんどんなくなっていくという現実の厳しさに耐える力もなく、不合格の原因を前もって自ら作ったり、責任を転嫁したりしてしまうことが多い。そして、非行や不純異性交遊などの問題行動に走ってしまうこともある。だから、家庭環境や交友関係等をしっかり把握し、気持ちを受けとめ、共感しつつも、厳しさを教えることが必要と考える。また、学習意欲をもたせる手だても必要と考える。それらを担任が一人で行うのではなく、「いつ」「誰が」「何を」行うのかを役割分担することが効果的だと考える。

7 不登校P」の実施

長期休業前、つまり学期に1回実施している。担任が作成した「不登校P」資料」(別添資

料5)をもとに、情報の共有化を図り、様々な立場からの意見を出し合い、今までの支援のあり方を見つめ直し、新たな方向性を見い出そうとするのが目的で、今年度から始めた。2～2.5時間かけて、一人の生徒につき30分程度相談する。拡大コンサルテーションとでも言うべきものである。

アンケートでは、参加者のほとんどが効果を認め、「たくさん見地から、生徒理解と支援についての方向性がもてるようになった」という記述に代表されるように、他学年のことについても話し合われるので、学校全体で取り組んでいるという、意識の高揚につながっていると考えられる。



不登校PJの様子

8 職員研修の実施

1回目は「生徒理解」、2回目は「カウンセリング実習」、3回目は「事例研究」をテーマにして行う。生徒指導主事、教育相談主任が企画・運営し、SCが講師を務める。

2回目の研修後のアンケートの記述には、「心が温まった感じがした」「活動があったので、楽しく行うことができた」「クラスでもやってみたい」「人の信頼に視点を当てた研修だと感じた」「先生方の素晴らしさを改めて感じた」「次回も楽しみにしている」というものがあり、大変好評であった。このような雰囲気ならば、次回はさらに中身の濃い研修ができると期待している。

表2 アンケート調査より(抜粋)

9 アンケート調査の実施

職員へのアンケート調査を1・2学期に1回ずつ行い、実態を把握し、その後の相談運営に役立てた。(別添資料6)

職員の意識の高まりが見られた。しかし、SCに任せっきりになる虞、また、SCとのコンサルテーションの時間確保の難しさも複数の先生から指摘された。

右の表(表2)の、質問項目1では、少しでは

あるが、生徒への対応について、困っていることが減り、もっとかかわりたいという意識の高まりが見られる。また、不登校の初期対応や再登校し始めの対応へ、意識が向いてきたことがうかがえる。「オ その他」の記述には「生徒の理解力に問題があり、話が通じない」との記述があった。

質問項目2では、依然として保護者への対応で困っていることが多いことが分かる。「オ その他」の記述には、「通じないことが多い」「親の養育態度が間違っている」などがあり、悩みの種は生徒よりむしろ親とも言える。子供への影響力の強い親の価値観を変えること、ま

質問項目	1学期	2学期
1 不登校の生徒の対応で困っていることはどんなことですか。		
ア 生徒の理解が不十分である。	ア 5人	ア 3人
イ 生徒にあった相談の技法・技術がわからない。	イ 6	イ 4
ウ かかわったり相談したりする時間がとれない。	ウ 2	ウ 4
エ 初期、或いは再登校し始めたときの対応がわからない。	エ 1	エ 3
オ その他	オ 2	オ 2
2 不登校生徒の親への対応で困っていることは？		
ア 学校に対する理解が得られない。	ア 3	ア 2
イ 連絡・連携・協力態勢が得られない。	イ 1	イ 1
ウ 家庭内の問題に介入するには限界があり、対応できない。	ウ 6	ウ 5
エ 保護者への適切な助言・支援の方法がわからない。	エ 3	エ 5
オ その他	オ 1	オ 4
3 SCとのコンサルテーションを行うときの課題は？		
ア スケジュールが合わず、時間がとれない。	ア 9	ア 9
イ 話しかけづらい。	イ 0	イ 0
ウ 何を話せばよいかわからない。	ウ 0	ウ 0
エ 自分の考えを言う自信がない。	エ 0	エ 0
オ その他	オ 5	オ 1

た、家庭環境への介入には限界があることを痛感していると想像できる。

質問項目3では、本校のSCは本校の実態に合わせ、すんなりなじみ、組織の一員として活躍していることが分かる。コンサルテーションの時間がとれないことが今後も課題だと考える。

また、2学期のアンケートにおいて、「9 昨年度と比較して、本校の教育相談について、変化したと感じることはありますか」と、「10 本校の教育相談の組織や運営に関するご意見・ご要望を聞かせてください」の問いに対しての主な回答を、次に挙げておく。

- 9 「SCとの連携で、みんなでやっていこうという雰囲気になった」
「ほっとルームの利用者が格段に増えた」
「先生方の会話の中に、教育相談や不登校生徒への対応の話題が増えた」
「ほっとルームが使いやすくなった」
「充実してきているように思う」
- 10 「SCにいやしてもらった」
「組織で行動している先生方をすごいと思う」
「現状でよい(素晴らしい)」
「SCと担任がもっと連携をとればよい(SCに丸投げしてしまわぬように)」
「SCの日程がきついと思う」
「不登校の予防や叱ること、ということで、研修が必要かと思う」

10 「相談室だより」の発行

教育相談主任、SC、町相談員、学年の教育相談担当が分担し、記事を書く。全家庭に配布。内容は、「ほっとルーム」のPR、学校の様子や相談の様子などが主である。(別添資料7)

「ほっとルーム」に電話での相談申し込みがあったり、相談件数も増えたり、部屋に立ち寄る生徒が増えたりと、効果は大きいと考える。内容の改善・充実を心掛けていきたい。

成果と今後の課題

1 不登校の状況と生徒の変容

(1) 集団適応力の育成

各教科の授業や総合的な学習の時間、学級活動や行事での生徒の様子を観察する限り、ほとんどの生徒が前向きに活動している。小さなトラブルは多々あるだろうが、生徒は悩んだり、生徒同士、または先生や相談員・SCに相談したりしながら、乗り越えている。その過程で生徒自身に適応力が備わってくると考える。そういった経験こそ、成長にとっては大事なことだと考える。教師はそこで、様々な情報を整理し、生徒個々の理解を深め、生徒に合わせた対応を考え、指導・支援している。また、時には手を貸さずに「待つ」ことも支援の一つと考える。教師の日常の観察力と、情報の流れが大切だと感じている。

(2) 不登校生徒の学級復帰

月に6日以上欠席(病欠以外)した生徒を月例報告として提出するが、報告した生徒のうち、4名は早い段階での対応によって、長引かずに学級に復帰できた。



ほっとルーム入り口付近

長期化してしまった生徒については、SCとコンサルテーションしたり、SCと保護者が相談したりしながら、チームで対応している。どの保護者も現在は安定している。3学期に休むようになった生徒についても、チームで対応している。復帰の兆しはある。

表3 月例報告に提出した不登校生徒の数と変化

	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	総数
報告人数	5人	5人	3人	2人	5人	6人	5人	7人	7人	
新規	1人				2人	1人		2人	2人	8人
復帰したが再発					1人					1人
学級復帰				1人			1人		2人	4人
6月から1名、病欠扱いとした。(医師の診断により入院予定)										

(3) 不登校や問題行動の予防

部活動内での人間関係で悩むケースが数件あった。そのうち退部した生徒もいるが、学校は休んでいない。また、学力不振や人間関係で心配な生徒へも配慮し、声かけをしながら、様子を見ている。各学年とも、保健室を訪れたり、表情や様子がおかしいと感じたりした段階で、情報交換し、対応を考え、動くよう努めている。

職員の意識や見る目が敏感になり、生徒の表情や様子の変化に早く気づき、情報交換し、未然に防げたり、軽微のうちに発見できたりしている。その後も、観察を続け、チームで指導・支援を続けている。教師の観察力と、情報が職員間を流れることの大切さを実感している。

2 指導・支援体制の変容と職員の変容

SCが他校での経験をもとに、本校の実態に合わせ柔軟に組織の一員としての役割を果たしているため、連携はスムーズに行われた。

生徒への指導・支援はコーディネーター中心の、生徒の実情に合わせたチームで指導・支援する体制に変わった。その中で、生徒の情報をつかむという点では、養護教諭の役割が大変大きいことが分かった。本校の養護教諭はコーディネーター役としても活躍している。

研修会の実施については、不登校PJと同様に今年度の新たな試みだが、回を重ねるごとに要領を得て、定着していくことを予感させる。実施後の感想や職員のアンケートにも、有意義だというものが多く、続けてほしいという声も多い。

アンケート調査や職員の会話の中に、不登校生徒や保護者のこと、相談技法などの話題が増えた。不登校を何とか解決したいという願いと、「ほっとルーム」を充実させ、本校の教育相談を全職員でつくっていかこうとする姿勢が見られる。意識が変容し、行動も変わってきている。そして、学校も変わろうとしている。

3 今後の課題

解決していくべき課題はたくさんあるが、「さらなる職員の研修」「SCとの連携のさらなる強化」「校内研修や職務による多忙感に押しつぶされることなく、時間を生み出し、効率よくコンサルテーションを行うための手だての工夫」「社会や生徒・親の価値観の変化や多様化への対応」を今後の重点課題として挙げる。

参考文献

- ・石隈 利紀、田村 節子 著 石隈・田村式援助シートによる『チーム援助入門』 図書文化(2003)
- ・若島 孔文 編 『学校臨床ヒント集』 スクール・プロブレム・バスター・マニュアル 金剛出版(2003)